

親から子へ
伝えていく、

黄金色の麦茶

えがお育む
大地から

太陽に照らされながら、
爽やかな初夏の風に揺らめく大麦の穂。
この畑から生まれる
甘く香ばしい麦茶に出会うため、
鶴岡市にある

庄内協同ファームを訪れました。

安全で豊かな味を
庄内から食卓へ

夏本番まであと少し。青々とした穂がすすく育つ庄内平野の一角に、大麦の畑を見つけました。「最高のロケーションでしょ」と笑顔で案内してくれたのは、三川町で約30年大麦の栽培を行う庄内協同ファームの組合員・菅原孝明さん。庄内協同ファームは、鶴岡市・庄内町・三川町で稲作や野菜・果樹栽培、また農産加工に従事する組合員によって構成された農事組合法人です。1987年に小さな餅の加工場を開設して以降、もち米やうるち米、枝豆、黒米など、有機栽培や減農薬にこだわった農産物の生産及び加工に取り組んできました。もちろん、菅原さんが育てている大麦もその中の一つ。転作作物として25年ほど前から育てるようになったと言います。また大麦は収穫期

が梅雨に重ならないことも大きなメリットになったそう。さらには、「麦茶を作るための麦作り」にしようと思案の加工も同じ頃、本場である奈良県にある専門業者に麦を持ち込み煎ってもらっていたんですが、将来的には自分たちで焙煎したいという想いを持っていたと言います。菅原さん。そこで、当時開発責任者だった菅原さんを中心に、農業機械を焙煎用に改造するなど、麦部会のメンバーという試行錯誤を重ねてきたと言います。その結果、低温でゆっくり時間をかけて煎る「低温焙煎」という方法にたどり着き、庄内協同ファームを代表する商品「低温焙煎麦茶」むぎちゃん」が誕生しました。



すっきりした甘さと香ばしさ、
そしてこの黄金色が特徴



愛情を持って大麦を育てている生産者の皆さん

麦の甘さに感動

菅原さんをはじめとする生産者の皆さんが、農業を使わず大事に丁寧に育ててきた大麦。それを原料にして作られた庄内協同ファームの低温焙煎麦茶「むぎちゃん」。グラスに注がれた麦茶を見て最初に驚かされたのが、その透き通るような色。「私たちは『黄金色の麦茶』と呼んでいます」と菅原さん。その言葉の通り、まるで収穫期を迎えた麦畑のようにキラキラ輝いていました。そして口にした瞬間さらに驚いたのが、今まで飲んでいた麦茶では感じたことのないような甘みと香ばしさ。「もっと焦がせばよく見かけるような濃い色の麦茶にはなるんです。でもそうするとどうしても麦本来の甘みが出てこない。私たちは低温で時間をかけて煎ることで、麦が持つ甘さと香りを引き出

しているんです。一度飲んだら納得していただける、そう自信を持っています」。美味しいことはもちろん、農業を使わずに育てた安全で安心な麦茶は、子どもを持つ親にとっても嬉しい一品。菅原さんのお子さん、そしてお孫さんもこの麦茶を飲んで育ったと言います。「むぎちゃん」は庄内地区の産直や鶴岡市内のスーパーなどで購入できるとのこと。「市販のものより少し高額になりますが、農業を使用しない安心で安全な麦茶なので、私たちとしては少しずつ広がっていったければいいかなと思っています」。

麦を煮出すとふんわり漂ってくる甘く芳ばしい香り。そこから、生産者一人ひとりの麦に対する愛情、そして子どもたちの健やかな成長への願いが感じられました。



農事組合法人
庄内協同ファーム

住所／鶴岡市八色本字西野335
TEL／0233-73 2420

麦畑を活かして作る 渡り鳥の楽園

収穫を約2週間後に控えた菅原さんの麦畑は、青空の下、風に揺られてとても気持ちよさそう。そんな麦の年は秋からスタートします。9月末から10月上旬にかけて播種を行い、雪の下で越冬。年が明け5月になって穂が出てくると、より麦らしい姿になります。そして6月上旬から中旬頃に収穫の時期を迎えます。寒さや乾燥に強く、「朝露だけで育つ」と言われ



庄内協同ファーム組合員の菅原孝明さん

るほど雨を必要としないことから、熱帯地域を除く世界の広い範囲で栽培されているそうです。そのため天候面での悩みはほとんどないという菅原さんですが、それでもひとつ、とても苦労されているのが草対策だと言います。庄内協同ファームでは作物の安全と美味しさを守るため、除草剤は使わないのが鉄則。そうすると草が生えてもそのままにするしかなく、草から麦が負けてしまふこともあるのだそう。そこで「水田用の除草機械を麦畑に持ち込んで使ってみ

たんです。そしてとてもうまくいったので今後の栽培マニュアルに取り入れていきたいと考えています」と菅原さん。現在、庄内で麦を生産する組合員は菅原さんを含めて10名。除草の他にも、麦のいもち病と呼ばれる「雲形病」の対策など苦労することは多々あるそうです。菅原さん、麦の栽培に力を注いでいます。

そんな中、菅原さんが4年前から始めたことがあります。それは以前、連作障害で生育不良に陥り悩んでいた時、生物多様性の勉強会で知った「なつみずたんぼ」という取り組みです。「これは、麦を収穫したあと農地に2ヶ月だけ水を張って、草が生えるのを抑えたり地力を回復させるというもの。渡り鳥の休息地や水生生物の生息地にもなるので、連作障害を回避するだけでなく、環境にもとてもやさしいんですよ。実際、取り組み始めたその年から様々な野鳥が飛来し、2013年にはなんと絶滅危惧種であるコウノトリまで現れ、驚きの連続だったそう。『今では、孫を撮るために買ったカメラを使って鳥を撮影することを楽しみのひとつにしています』と充実した表情を浮かべる菅原さん。ただ麦を栽培するのではなく、いかにそこに付加価値をつけ、日本のためになる農業をしていけるか。菅原さんは真剣に日本の未来と向き合っています。

